2011年06月27日 中日新聞 朝刊 27頁

備える3.11から　第6回　どう逃げる

避難経路 選び抜く

坂道避け、橋崩落も想定

岩手・野田村保育所

約二万三千人の死者・行方不明者が出た東日本大震災でも、周到な準備や訓練を生かして避難し、命を守った人々がいる。東海、東南海、南海の三連動地震が起きた場合、私たちはどう逃げるべきなのだろうか。東日本の被災地からヒントを探った。

岩手県北東の沿岸部にある野田村。大震災で三百棟以上が全壊、三十七人が死亡した。湾岸から西に五百㍍の野田村保育所も、木造平屋の建物は津波に流され、今は石碑と門柱が残るだけだ。しかし綿密な避難計画が零～六歳児九十四人全員の命を救った。

保育所は、四～五年前に避難地域に指定され、消防署に提出する避難訓練計画を作成した。取りあえず高台の中学校を避難所に設定し、一・五㌔の公道を使うことにしたが、所長の玉川久美子さん（五三）は「坂道や回り道があり、逃げ切れないかもしれない」と不安だった。そこでひそかに計画を練り直した。

まず、乳児十人が乗れる大型乳母車「避難車」を購入。ほかの子どもはおんぶひもで背負ったり、手を引いたりすることにし、保育士が誰を担当するかもきちっと決めた。

悩んだのは、避難ルート。あぜ道を通ることを検討したが、「うまく避難車が押せず、子どもも歩きづらい」と断念。中学校より近い役場への避難も「途中の橋の崩落や増水で川を渡れないかもしれない」と、リスクが大きかった。

目をつけたのは、保育所から六百㍍離れたやや高台に立つ農業辻鼻久さん（四四）の自宅。そこを一時避難所にして、さらに逃げる必要があれば、辻鼻さんの畑を横切り近道して中学校にたどり着ける。当時、保育所側が辻鼻さんの父に避難時の使用を頼むと、快く引き受けてくれたという。

保育所は辻鼻さん宅まで十三分で逃げる目標をたてた。数カ月に一度訓練し、十五分で行けるようになった。そして、三月十一日が来た。

地震発生後、子どもたちは机の下に隠れ、保育士は避難路を確保するため玄関の戸と窓を開け放った後、ガラスが飛散しないようにカーテンを閉めた。すぐ避難を始め、辻鼻さん宅に到着。津波を確認すると予定通り、畑を横切って中学校に向かった。園児の姿を見て逃げだし、命拾いした住民もいたという。

「夢中だったので、何分かかったかはよく分からない。でも、三十分後に街は津波にのまれてしまった」。主任保育士の広内裕子さん（五四）は言う。

六月十六日、現在は新山児童館に入っている保育所で、震災後初の訓練があった。「『もし津波が来たら』といつも自分に問い掛けていた。だから真剣に避難路を考えた」。玉川さんはそう振り返り、熱心に訓練する子どもたちを見守った。

（中村禎一郎）

野田村保育所からの避難ルート

園児は畑を横切って逃げた

一時避難所になった辻鼻さん宅

野田村保育所の様子（6月16日撮影）

民家通り近道 訓練で時間短縮

釜石東中の機転

危険感じ高台目指す

率先行動 周囲も続く

海岸から五百㍍離れた岩手県釜石市鵜住居町の釜石東中学校は、大震災で校舎の三階まで津波が押し寄せた。地震発生時は終礼の時間帯。校内にいた生徒二百十二人は、機転を利かせて一・五㌔先の高台に逃れた。

釜石市は、各教科で津波の話題を扱うなど防災教育が盛んだ。同校も、年七十時間の総合学習の三分の一を充てる。生徒たちは、地域の人と防災マップをつくり、災害時の炊き出しも体験。文化祭では、先人たちの津波の教訓をヒーロー戦隊仕立ての寸劇で披露するクラスもあった。

寸劇の主人公を演じた三年生の佐野凌太君（一五）は、体育館で激しい揺れに襲われた。

「ただごとじゃない。授業で習った大津波が頭によぎった」。靴を履き替えずに運動場へ飛び出し、決めごとの点呼も省いて仲間と避難場所に駆け出した。

隣接する鵜住居小学校では、児童たちが校舎三階へ避難を始めていた。ところが窓の外では、中学生が一斉に校外へ逃げ出し、「津波が来るぞー」の叫び声も。間もなく校内放送で「外へ避難してください」と流れ、児童らも後に続いた。

小中学生が向かった避難場所は、学校から五百㍍離れたグループホーム。十分ほどでたどり着くと、裏山から小石が次々転がり落ちていた。土砂崩れの危険を察知し、誰ともなくさらに高台へと走りだした。

中学一年の佐藤桃香さん（一二）は、避難の途中で周囲に人が増えていったことを覚えている。たどり着いた高台から町を見下ろすと白煙が上がり、学校や最初の避難場所は津波にのまれていた。

釜石市で防災教育を指導してきた群馬大の片田敏孝教授（災害社会工学）は①想定にとらわれない②状況下で最善を尽くす③率先避難者になる―という避難に重要な「三原則」を、生徒らが体現したとみる。

つまり、最善を尽くして素早く逃げ、率先避難者となって周囲を巻き込み、想定にとらわれず最初の避難場所から離れた。この行為が命を守ったという片田教授は「日ごろの訓練でも、あらゆる場面を想定して主体的に考え、行動することが大切だ」と話した。

（加藤弘二）

津波から避難する釜石東中と鵜住居小の子どもたち＝3月1日、岩手県釜石市で（片田敏孝さん提供）

次回は余震・誘発地震について考えます。

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています

2011年06月27日 中日新聞 朝刊 27頁

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています